

## 『人間の安全保障』の実践には、人々が置かれている現状の把握がカギ

「人間の安全保障」のモデル案件として注目されているセネガルの「安全な水とコミュニティ活動支援計画」を担当している杉田映理さん。「人間の安全保障」がどのように実践されているのか、またその成功の秘訣とは？

### 「人々」の現状把握が重要

セネガルの「安全な水とコミュニティ活動支援計画」は2003年1月から3年間にわたり実施されました。過去に無償資金協力で整備された給水施設を、行政と村落住民が連携して適切に維持管理し、持続的に安全な水を確保していきけるよう、住民参加型水管理組合をつくり、それをきっかけに養鶏など村の自立を図る支援を行いました。また、他ドナーとも協力してマニユアルの標準化を図るなど、行政側への働きかけも進めています。このように、「人間の安全保障」の上からと下からのアプローチ、点から面への展開などの視点が実践されています。

実は私がこの案件の担当になったのは昨年5月。その前はしばらくJICAを離れて大学に在籍し、フィールド調査などに携わっていました。復職後、この案件の担当となつて、自分なりに「人間の安全保障」の考え方や具体的な案件での実践について勉強しました。「人間の安全保障」は「人々を中心に据え、人々に確実に届く援助」を重視していますが、私はその「人々」がどんな状況に置かれているか、社会状況を的確に把

握することが大切だと考えています。このプロジェクトが「人間の安全保障」の実践例として評価されているのは、専門家が現地事情に精通していたのに加え、現状調査や社会分析がしっかりと行われ、住民とのコミュニケーションが図られたことが大きいと思います。視点を「方法論」に整理する

「人間の安全保障」はリスクに脆弱な人々を特に重視していますが、住民自身がリスクを予防する能力をつけることも大切です。この案件では、水管理組合が故障に備えて資金を貯蓄しておいたり、修理技術の研究を受けたりすることで、住民がリスクに対応できる力を備えることにも配慮されています。ある村の女性が「以前、給水施設が壊れたときには誰もどうすることもできず、9カ月もの間、何キロも先まで歩いて水くみに行かなければならなかった。もうあんな経験はしたくない。これからは自分たちで維持管理していきたい」と力強く話していたのが印象的でした。

今後は、組合がうまく機能しているかどうか、自立を図る活動が展開されているかどうかなど、現地の行



JICA地球環境部職員  
杉田 映理

Sugita Elli



給水塔(後方)と水道のおかげで、村人たちは容易に安全な水にアクセスできるようになった。施設の管理も水管理組合が行っている。セネガル・ルーガ近郊にて(撮影:今村健志朗)

政によるモニタリングとフォローアップが重要ですね。また、JICAとしては、こうした案件での具体的な経験や実践例を今後に生かしていきけるよう、「方法論」として整理し、共有化することも必要ではないでしょうか。それは、援助の実施機関であるJICAが、実践の部分をしっかりと積み重ねていく上で大切なことだと思えます。